

期刊社出版 令和5年6月1日発行（毎月一週一日発行）発行所 神戸 第54巻第6号

沖

6
2023

9850000000000



膝

行

能村 研三

大量得点の裏には

コロナ禍が幾分収まりかけているせいか、このところ「沖」の例会句会に多くの方が参加するようになってきた。大変うれしいことである。多くの人が一堂に会せる句会の醍醐味といったものをひしひしと感じることができている。

句会でも、点の入る句は一句に十数点という大量得点となる場合があるが、こういう句の場合は、句を替める前に、まず逆選の方の意見を聴くことがある。

大量得点を取るぐらいの作品であるから、リズムが整っていて確かに口あたりがよい句なのである。

また類想類句に気づかず、多くの人が使うパターン化した句を選句してしまう場合がある。

いろいろな俳句大会では、優秀賞に選ばれた句が、かつての類想類句ではないかを慎重に確認する作業が行われる。俳人協会には類句検索システムというものがあってただちにそれを見つけて出してしまっ。

□あたりの良いフレーズであると選句者も心を動かされやすいものなので、特に誰もが□にするもの、誰でも思いつくような発想の句は要注意である。

類想や類句を避けるにはどうしたらよいだろうか。それには句集・俳誌・総合誌などを「多読」して、多くの句会に出て、誰でも思いつくようなことや類想が多い句材を知り、意識してそれを避けるように努めることで、同時に句の独自性、意外性を高める努力も欠かせない。

類想類句に陥る一因としては、「俳句らしさ」にこだわりすぎるパターンもある。

先師の登四郎は「本当のうまい俳句はうまさが目立たないものであり、すぐれた技巧は一見無技巧を思わせるものであることを知らなくてはならない」(「能村登四郎読本」能村登四郎語録)と言っている。

菜の花の上に沖あり安房の国
渾身の闇が咲かせる白木蓮
春愁や音をこぼさぬ砂時計
ややありてより春雷と気づきけり

花筏こはさぬやうに鶴の滑走
黙読のときをり声や花ぐもり
戻りきし本に折りぐせ養花天

膝行の仕草で坐る花筵
桜蕊降りつぐ雨の金曜日

暮の春間口の狭き画材店

吹雪く花突つ切つて来る鼓笛隊
飛翔とは美しき言葉や山毛櫨芽吹く
茹でられて恥ぢらふ色の桜鳥賊
山葵田に手足芯まで覚めにけり
暮しにも起伏ありけり花は葉に
鮎の子に勢の性のありにけり
退職や鮎解禁を楽しみに

鯉職の季節なので、登四郎先生にどんな句があるかと全句集を捲ってみたが鯉職を詠んだ句は見つからず、少し不思議に思っていて目に止まったのが、〈鯛はれぬる山女魚さわげり山雨来て〉という御句である。私にとって山女魚は少年時代によく釣った魚だけに何となく嬉しい気持ちになった。先生は山国でも旅行されたのであろうか。養殖ということでもなければ山女魚は宿の庭の池に放たれていたのであらう。溪流にいてこそ山女魚であり、先生は狭い場所の流れもない池で、静かに尾を振っている魚を憐れんだに違いない。そこへ急に山の雨が強く降り出したのである。うち重なる水輪の下で右往左往する山女魚の姿に、今度は山女魚本来の野性味を先生は感じて見つけていたのである。

山女魚は二十センチぐらいの読んで名の通りの美しい繊細な魚であり白身で美味しい。それに対して男性的な魚は獷猛な岩魚であるが、先生には岩魚の句は多分ないと思う。

濤声集

老女書生で

千田百里

礼深くしてより杜の霞吸ふ
侍ジャパンに倭の山のみな笑ふ
満天星やリヤカーで来る宅配便
シクラメン老女書生で酒好きで
*来し方を辿れば桜隠しかな
終着は根の国ならむ花筏

押し流す

辻美奈子

押し流す魚のなきがら花筏
飛ばば風落つれば水に消ゆる花
*陽炎となるまで人を見送りぬ
波に声あり春のほか何もなし
二億年果てに亀鳴く夕べあり
穀子の目の窪みをる穀雨かな

蒼茫集

金鳳花

大畑善昭

海までの溪を縫ふ道幣辛夷
到来は土佐の文旦空海忌
花万朶風が立つとき水が揺れ
曇る日のまことぴかぴか金鳳花
豆を蒔く老人こころ蒔くやうに
* つつましき鳥の巢僧に応量器

夕さりの

田辺博充

* 花月夜死が宿題のやうにあり
暮れの鐘歩む寄居虫を急かせけり
バレンタインデー髪減りし淋しさも
亡き人に逢ひたくて吹く石鹼玉
おほかたは雨の重さの春子採る
夕さりの麦踏んでゐる教師かな

日を織る水脈

甲州千草

轉にほぐされてをり朝の四肢
ホテルの銅抜けて行くなり桜時
向ふにはいとほぬ茅花風ならば
* 濃淡の日を織る水脈の花筏
三師句碑の錆朱の映ゆる花の昼
何に鳴く護岸を仰ぐ残り鴨

波白く

田所節子

* しやぼん玉太陽の色吹かれゆき
桜咲き満ちて渴きを覚えをり
うららかなや産湯の嬰にガーゼ被せ
のどかさや湾を縁どる波白く
筍の掘りたてといふ泥の靴
2 Bの芯すべりよき穀雨かな

飛鷹選評



能村 研三

さくらさくら香りは空に忘れしか

竹田 絹子

昔から歌われている童謡の「さくらさくら」の一節に「かすみか雲か匂ひぞ出づる」とある。ここで言う「匂ひぞ」は嗅覚というよりも「視覚」でとらえたものとされている。桜の香りとして思い出させるのは桜餅の葉の香りだが、桜の花自身の匂いではない。見事に花を咲かせる桜は、香りを空に忘れてきたのかも知れない。

陽炎に入りてかげろふ見失ふ

工藤 邦子

陽炎の先へ進もうとしてもいつまでも追いつくことができません、そのうち見失ってしまふ。陽炎の中に見えたものはゆらめく陽炎のなかに溶けるようにして遠ざかって行く。白日夢のような非現実的な世界を見たような気がした。

春風に色のたゆたふ花手水

吉村さよ子

古来からの花手水とは、水の代わりに花や草木の露をつかって身を清める作法のことをさす。コロナ禍にあつて寺社では手水を中止するようになり、一時的に使わなくなった手水舎や手水鉢に花を飾るといった動きが、全国の寺社に広まった。春風に揺れる花手水は、私たちのところを癒してくれる。

のどけしや一打の余韻時の鐘

久間 早苗

ここで詠んだ鐘は、川越の蔵造りの街並みにひとときわ高くそびえる「時の鐘」である。一日四回定刻に鳴る鐘の音は、小江戸川越の情緒をたつぷりと味わわせてくれる。日も長くなり、時間もゆるやかに過ぎようとしていた。

さ緑にけむりて雨の遠柳

池田 文枝

柳の枝が雨にけぶりながらなびくさまは、若緑に霞んで見えて趣が深い。ことに枝垂れ柳の鞭のような細い枝に点々と芽が吹いて、川風に揺れる姿は春の訪れをまさまざと感ぜさせてくれる。遠く煙る柳は遠ざかるにつれて色濃く見えてくる。

弓反りの城の石積み江戸桜

川和 宏平

城の魅力はその造形美にもあると言われる。中でも濠にそそり立つ石垣は下の勾配はゆるやかなのに、上に行くに従い勾配が急になり、「武者返し」と呼ばれる反りを見せてくれる。弓反りの城という表現が勇敢な武将がいた城に相応しい。

自転車に春を詰め込むポンプかな

佐々木 茂

穏やかな春の一日、これからサイクリングに出かけるのであろうか。少し遠出にもなるので、タイヤに空気を入れて万全を期すことにした。空気を入れる作業までもが楽しくなってきた、まるで春そのものを詰め込んでいたようであった。

伝統は見えざる誇り卒業歌

長山 正子

卒業にあたり改めて先輩から引き継がれた伝統的な校風が、自分たちの誇りであったことに気付いた。それも形があるものでなく、心から心へと受け継がれていくものなのである。

未だ知らぬ

七田 文子

* 遠とふは美しき距離春の虹
旅の夜の睡り誘ふ木の芽雨
惜春の動くともなく動く雲
手を逸れし夢のいくつか紙風船
未だ知らぬことのどれほど黄砂降る

大卯波

栗坪 和子

* 水亭にまづ灯されし雛の燭
つちふるや茶の間も次の間も灯す
白木蓮月まだ色を失はず
大卯波空のはじまるところより
春の日のとりどりの帆を惜しみけり

イースター

多田 ユリ子

* 花いまだ大きな空を見てもどる
石舞台朧の月を挙げぬたり
春雷や紅締まる薔薇の棘
春祭 石一枚の橋渡り
切り株にたつぶりの雨イースター

泥あそび

小林 陽子

* 逆光に一輪透けて初桜
折詰の退屈さうな桜鯛
初つばめ子の泥あそび果てしなく
春筍の光溜めたる産毛かな
膝上の旅信に降りて桜蕊

春の墓

村上 葉子

* 木々はみな自由自由と芽吹きたる
悪人も善人もみな春の墓
妹といふものをらば桜餅
ひとり去りひとり来る庭夕永し
緋の幻影すこし開きたる雛の駕籠

貝の黙

浜田はるみ

* 春の雲へうたん島の動き出す
耕しの一村誰も鍵持たず
春雷や砂をはなさぬ貝の黙
水昏れて沖あるごとく花明り
別の世へ行つて戻りし花見舟

春風

中村 重幸

* 咲きさうで咲かぬさくらに似た二人
春風に十頁ほど先読まれ
啓蟄の闇をめぐりて始発かな
春の月つかめと父の肩車
水ゆるるたびに伸びゆく水草の芽

朴の芽

鈴木 基之

* 焦らずに生きてけふあり豆の飯
箸置きのやうな船行く春の海
出航の錨のこぼす春の水
和紙揉みて翳の生まるる春灯し
朴の芽を抱く精霊の吐息かな

跳ね橋

澤田 英紀

* 剪定の銚いのちの整へり
跳ね橋の打ち上げてゐる春の月
竹箒かるき音立て春の雲
木蓮の華燭となりし夕間暮
風光る絵馬は祈りの音奏で

蘂ゆる

坂本 緑

* 背の低き洋書全集日脚伸ぶ
剣山のあるやのごとく蘂ゆる
正直に生きて桜の前に立つ
路の臺母の思ひの点在す
春愁ひ母の使ひし化粧水

沖作品



能村研三選

初蝶や天地返しの上にふれ

東京

竹田 絹子

ものの芽の祈るかたちに膨らめり

小さき旅花菜浄土の小湊線

* さくらさくら香りは空に忘れしか

飛花落花空の明るさ地に散華

* 陽炎に入りてかげろふ見失ふ

童神へ流れひとすぢ芹青む

ものの芽や柚小屋の窓開いてをり

亡き夫の変らぬ椅子や春の月

余寒なほポストに落とす封書かな

食膳の箸取り直す春の雷

伝説の天狗こはがる遠足児

春風に色のたゆたふ花手水

* 小花蜂シャッター音の中に入る

春風にひとり陣取る小鮎釣り

千葉

吉村さよ子

青森

工藤 邦子

早春の産着高々干されあり

埼玉

久間 早苗

レモン色出会ひがしらの春コート

曲り角右はミモザの花の家

* のどけしや一打の余韻時の鐘

ばくだんむすびをみな二人の花の昼

花の昼薄茶点前の緋毛氈

千葉

池田 文枝

覚めやらぬまま衣解く花の酔

叢雨のにはか水路に花筏

* さ緑にけむりて雨遠柳

川波に行く先委ね春の鴨

初桜一步踏み出すズック靴

花冷や古民家カフェといふ時空

隠りぬし時の永さや遅桜

弓反りの城の石積み江戸桜

夜桜や灯りて暗き朱塗橋

東京

川和 宏平